



~ 13
3101
1



故人為永壽水
口画 漢書 英名画
葛飾 為壽水
阿比 鎌山 進士

天竺得瓶仙蛙奇録
五卷

東都書林 文漢堂
浪華 士林 群風堂
荏行



九月二三日
晴

金示

天竺得瓶仙蛙奇録第一輯簡端餘言
一日浪花の書賈群鳳堂の主人予が蘭室を敲き齋一來り一本どの予の
補綴せしと請ふ解披て閱むると一帙凡五卷あるべし并刊刺せし摺本
るはとも巻毎の五丁七丁闕する所を更と得て就中第二の巻六更一
楮もあらずと怒ハ五卷あるんりの四巻ありし尚俱促せし出像もとも
准ひて更く六闕七残る平より訝き更限りしはは縁故を索る書肆
嘆息しと曾て謂らく這ハ去稔年浪花の旋客櫻井某が舊稿
ありしを其頃故翁初代の技訂を得て軀て梓み上せし不意も他
魚の殃ありしと草稿ハハバさるり彫板之の失ハ畢ぬ遮莫焦玉に
洩る板の亦るさふしもあらずと其後捐んハ遺憾不憚だ仍て再ハ
憶族しとそ残るると拾ひ集りて補刻の功と做し一臂の力を

添て闕する條と補ひのつゝ埋る樹の世ぬ出て再び春ぬ遭へるべけん。
争々と乞ふまゝの肚裏ぬ懐ふや。他一作者の舊案を今更補
綴んと鳥辭する所業ぬ似まじも既ぬ先師舊訂の書并を解ん不
信なりと沈吟する夏半响許り書賈の諄々需き己ぬ其のふとる理
ひるが故ぬ漫然とく領ひら更ぬ闕文を輯録し誤愆を訂正するぬ
至りく予ハ亦短才魯鈍るまづ木とりの竹ぬ継るがごとく具眼の謗を
甚麼せん余とく己ぬ夏うかねば殊々冬夜ぬ筆を缺りく只管油
燈と費もの既ぬ一二外漸ぬ補果り全局五卷ぬるぬあつひそ
有つる依ぬ春の名を仙蛙奇録と題し措り恣に其書画二工なる
开も又故ぬ依ましく思へど原の畫工溪齋へ前総遠行し書工ハ
小日向の某よりしが是將業を捐すまづ画ハ柳川氏と書を模写し

書ハ音成子と書を録し書画悉く成るぬ到りく書肆復と書を闕人の
委ね自工を促す支性急ぬく虚日ぬ。吁嗟假の世の渡行榮
たりとも歡ぶべしと哀うとも悲しむべしと此書や一回鳥有せられて
其書画校訂の人も或ハ亡し或ハ散ぶ余と今更補刺を得て
疾達するの春ぬ遭へる人世總て此のどと茲ぬ自己と感悟しハ
空の中なる空言も又是善巧方便ぬと开と捐するが佛性智識捐
得りしが自性の戲作者戲墨のうぬぬぬた夏まじと考出しと
一笑ぬるとき書賈復来りく成功と報知簡端ぬ自序ぬたを責む
余ハ倉卒の間ぬ憶ひを回すぬ違ぬ即本編稍久しと世ぬ出るの
趣と速るものつゝ端楮と塞ぐ

嘉永四歲 辛亥 孟春吉旦

為永春水識

得天竺

仙蛙奇録第一輯總目錄

全本五局

壹卷 第一回

輪笠城直冬遺後嗣
雲弓濱通教次前妻

卷 第二回

索初音主僕到奇遇里
燠曠昏老媪懺悔舊過

貳卷 第三回

相似玉石害一夫一婦
不明一級爭赤松赤松

卷 第四回

施術道人救胎子
報恩忠臣換君身

三卷 第五回

能勢溪孝子蒙神助
吉川菴貞婦啓天書

卷 第六回

贊小柄退糧人促婚
怪妖氣優婆塞覓舍

四卷 第七回

設言語韓衣詰門平
明素性正節說往時

卷 第八回

舍山神祠虎王斬鬼
尋賊通教遭故朋輩

五卷 第九回

留旅客賊婦俟夫主歸
擊錄六兩士清夫人讎

天竺首忘永七年五月
終同年九月下旬

通計九九回

仙蛙奇録第一輯總目次畢

群鳳堂梓



韓衣

瀬平妻
吳羽



白頭波上
白頭翁
家逐船移
浦々風
一尺鱸魚
新釣得
兒孫吹火
荻火中

漁夫
瀬平

水勢鼓動而
美惡判然



吉川
小主人

漢水



浪人
五郎



鋼鍔
鎌六



雪隠
鷺鷥
飛始見
柳藏
鸚鵡
語方聞

勇臣
虎王丸

二面



〇五七



手のひらひら
 楠大日凡
 正節

風穴目と枯野乃
由布須と嘉

足利
左馬頭
直冬



天竺
得龜
仙蛙奇録卷之一

東都

為永春水補綴

第一回

輪笠の城に直冬後嗣を遺せ
雲々の濱に通教前妻と資く

うつく。皇大國の室祚を傳令九十九代後光嚴院の御直位文和延文の頃よりけり足利左兵衛督直義自立の志盛なり喬慢我意の武蔵の傲り忽地宗族の因と放き嫡庶の好と忘却し將軍家へ弓を引くうら了みその更らるる鎮西の霜と消し其子左馬頭直冬も父の遺志とつれ残臣余黨を擔ひて叛逆の色をあらわし再び千代と父の遺志とつれ残臣余黨を擔ひて叛逆の色をあらわし再び千代と因幡の國輪笠の城に勝りて恩顧の兵士八千余騎を楯籠り猶も近國の野武士を招き勢ひ猛くをまける是より山陽山陰の両道より京

都へ急を報知と櫛の齒を引うぐり周章おろろろきりうぐり當下室町の
 管中少足利三代の將軍義満公去る應永元年冬十二月太政大臣小任せ
 らし征夷大將軍と長男義持朝臣小讓りゆひ其身ハ北山より金閣より轉
 住く在せしごとく尚も國の政を補て諸國の騷亂を鎮りゆひ軍勢小隙を折れ
 在京の諸將大少騎更に商議の及ぶゆゑに因幡隣國の支小しゆは辰
 破して齒寒きの壁速の馬と指向け誅伐平治せしむべしと即武官の口下知と
 破る播磨國の守護職より赤松刑部大輔貞村と大手の大將と定りゆひ副
 將一族よりける同三郎滿祐ととく侶の五千の人数と授け猶も執ひを示え
 たり中國の軍勢催促の御教書とる賜りける時小應永七稔より五月上
 旬の支小しゆは軒の菖蒲浦と背をて風香くく都の空と迹小見
 あり西將貞村ハ勇る駒の鞭とひげ夜と日の次で風戦く因幡の國小攻
 満祐

下り輪笠の城のころころ對が岡の陣と張り橋小臨と變小應るまき
 軍慮少らば勝さば鶴と銷りく戦ふゆゑ貞村ハ奸智小長と長石
 尖き英將の目小慮と遠き不回らる境と固め兵糧の運送とさし
 又滿祐ハその春秋のまご九歳小滿とて青年勇悍ゆゑのまご
 兵が軍法常小意中の畜と機密を謀る良策ゆゑ後の峯の閑道小心
 兵士を遣し水の半と立切りせその身小陣頭小在る或ハ夜討或ハ朝馳進退自
 在の駈引小頗る敵と勞らせし直冬勇猛山と抜き智慮海と測るとも争ら
 是小敵とさき糧小尽水小渴と一旦の義小依て催促小隨ひる國人野武吉
 輩ハさき拔く小落失り今ハ譜代恩顧の者の二三百小過さる夫之軀俵力
 勞て防禦の用小宛さし指りと数るるまごや這城の落んと一日二日程
 るるべし去程小守將直冬ハ今ハ是とせると年頃厚く慈心と附へし

侍女兵羽とる者と側近く招き言ふや。你ハ膂力男子ハ勝り心さるも
 又雄々として劍法柔術又バききなり。和漢の史中も最委しく衆ハ超る才也。
 意中の機密を説明し、更を託る仔細あり。豫て你も知るがごとく、我父直義
 壮年より兄尊氏と威を争ひ不快の思ひ絶ざるをのり自立の志頗るれり。
 徒ら辛勞の吾苟も先考の遺訓を守り時を得ば義満父子を推介し將
 軍の任を奪ひて四海を掌握せんもの。此年頃の病望も又是画餅なり。泉
 今滅亡の時来り。速莫直冬が存念ハ今を限り止むべし。運命空しく此城ハ
 歎とて名を埋むとも宿怨長く止まりて義満義持のふささるる玄孫の代ハ
 至るまで國家ハ悲なるさやわくべし。斯ま家の嗣を残し後の策を設ることを
 宜け且女がらも你が智勇最憑しく思ふなり。這回の大事をまらるる
 の。弟虎王と心と合せ争闘を斬抜て飛鳥前と韓衣姫を衝く城より資

出し如何なる國も身と道と時節と待て折と見合せ吾家ハ好む。
 良將勇士と談ひ寄る家再興の軍を起し我宿怨を晴さしと言語
 短く説示せば兵羽ハ流る涙と拂ひ仰めては。且ども年月吹き泰せし
 御最期の今ハ至りて御供も俱に。あはれ城と落延て復めり
 くも存へんや。女子の侍もとも天晴真途の伴侶ハ召せんと。勇ま
 る心潔く速けし。直冬頭と左右あり。否汝が言ふ所一旦し。其
 義違ふ夫死ハ易く生ハ難し。殊ハ殉死ハ従ふこと尋常の心あり。
 幾許の艱苦を凌ぎ命全く存生て後の大夏を謀る。並にの業ハ
 の。今四海一統ハ室町の威ハ靡くと。筑紫の菊地の殘黨
 周防ハ大内の余類。豫て其心と合せ義満父子ハ怨われ。如何も。七
 彼所へ落行夏を計らば不日數七今日の恨を雪ぐべし。上段の間ハ飾置る

白木の箱より茶くし取出しする白旗と着る鎧の引合より肌
 着る吳郡の綾の結の袋小藏する一面の明鏡と取出し手渡
 知むや是へ足利の家小傳り二ツ引両吾父直義古より大望の宿
 意ありて兄尊氏の宝藏小秘置とて奪ひ置て没後小吾小附與多り
 後日大義の企成て鏡と上る時来らば是を以て武威と顯し勇威と諸將小
 企まへ亦此鏡の南朝へ直義降奉りつる砌三種の神宝小比へて銀を以
 三種の宝物真武の御劔紅雀の御鏡探題の印則ち是より真武の劔ハ
 吾身小帶て平素放を夏なけり天晴今日の戦ひの花くき働して奇手の
 眼と威まへ又深く思ふ所わらば劔ハ暫我身を放まて探題の印ハ飛鳥の前
 得より肌小著れば是を心と必む人小奪ひ置る只此鏡ハ殊更小家小秘する
 御室にて其由来を精細に記添する傳書もめは六努怠らむ心を用ひて處女

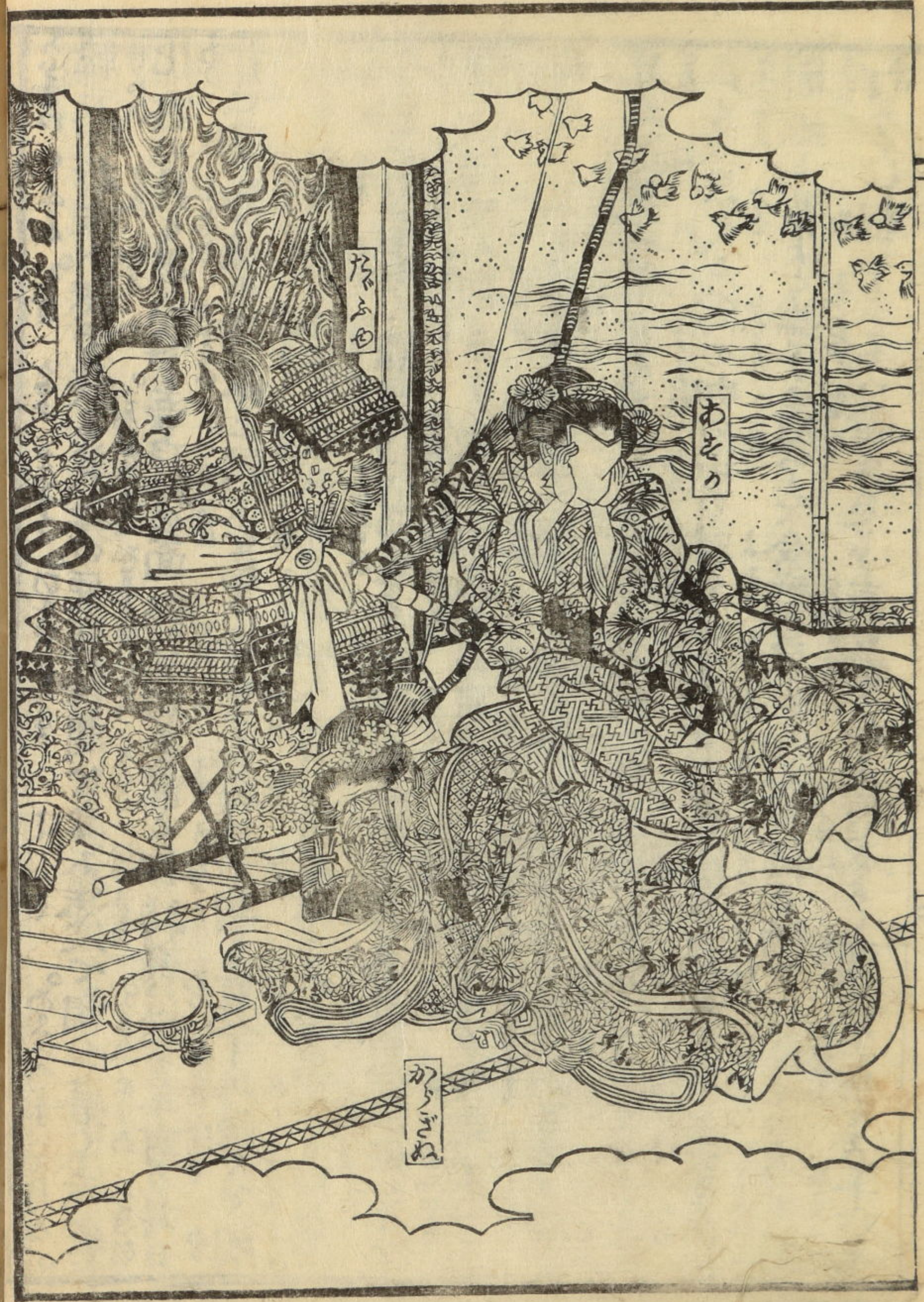
韓衣が行末の契り談ふ英雄の便宜待間と身小添へて朝夕磨く赤心の
 化粧の具と思ひ込む吾亡跡の面影と移さば秘持るべき年有り月日
 有て這御鏡の傳來と顛末を知る時わん將用る期も有へ此種を明
 證として諸國の將士と談ひ寄ら菊地大内ハ言小及ばむ其餘の武士も隨從と
 吾家小心で寄ん能心得て落延よと心苛立呼出を飛鳥の前韓衣姫の手を
 携へ諸共小後房より轉び出直冬の左右より鎧の袖小まきり付韓衣姫ハ
 殊更小年も若葉の色深き閨の戸洩て草杭旅立今日の真愛別は踏
 見ぬ道芝の葉末のり露霜と置行父の身の上を思ひ過してよくと
 声も音を入る鶯の卵の中の時鳥吾子ながらも俣るぬ世小立甲斐も言
 園蝶よ花よと撫子の盛りを余所小生死の海と隔る物思ひ聞心の木下
 打らむ心眼と直冬の瞬さる声曇りや韓衣よ聞ね生立ても十六年

小 婦 品 鏡 直
 委 吳 金 を の 冬
 ぬ 羽 勇 二 旗

山 挂 奇 録 卷 之 一



〽 〽 〽



仙 史 奇 録 卷 之 一

〽 〽

〽 〽

〽 〽

花の耻ぬ色も香と余所の詠と過來せ我存念と今と明せ飛鳥前も
 呉羽と俱に聞て左とと推慮と柳直冬大望の志いと深けと先年諸國の
 乱も無と城郭地の理と探らん爲國と巡る内大和の國三吉野の麓の
 宿取らねともの辻堂一夜と明も月も限る望の夜の影さ入る光の見
 といふ十三歳計る男童のいと怜悧げらるる月の光も熟讀の書の所
 謂太公が秘と傳へる兵書の機密乱とる世と云らる不思美の奇童も
 物も心驚き談ひ寄り子細と問ふ住所と言も素より名無明なれば
 知る旅衣着の馴れ一夜の友も望の身の暮しく兎も角もして因まじやと
 猶も親しく談り合吾の一人の處女の足下後年業成て望と遂る時のいふ夫
 妻と成て世不知の家とも身とも興さよと後の證を取らせ辭句の詩此有
 又桃花を彫る小柄と渡し誓と約せ吾心の桃の夫とる之子此嫁とる舌

語も提げり彼方よりも柳の枝も半月と彫る小柄と吾も與て證とる彼者
 無双の英やられ必き天下の名を爲さん此年頃を數擧看れば今年に計るべし
 如何も素性と看的な軍学兵法精煉る天晴勇くは天丈夫後年
 天縁奇遇と不思美巡り逢ふ夏あは彼と憑て夫妻とる力を台せ大
 夏と謀り吾家を再興し今日の恨と晴まへ軍勢の閑暇を物とる彼が
 在所と需るよりも青年の年を休めし誓とる撰む今日までも過し心此故
 りと彼詩の短尺と半月の小柄と包んで韓衣姫の半の渡し朝の父の心して
 身の憂夏夏のつりとも病を悩ひのいと流石尖き鉄石心も子故弱る恩愛の
 惠も姫の堰潜来る涙と袖も搔拂ひ海よりも深く山よりも高き惠を余必
 ちて出る此身の行末も猶慈愛の敷くと頼ひもやと一日の孝行も休まぬ
 斯る憂夏夏の罪科へ沖行舟も大路車もわら積るる慮に在るも母上諸共

榻手の攻口破と込入敵ハ惣曲輪一二の木戸も保ち難て足並漂ふ某方の
 勢と八方へ馳散し自ら進む三郎満祐廿歳と過ぬ若武者の手並も
 ぞ切立ちし防い味方へ残りなく杭を並べ討死し踏止る者西三人
 某ハ大将の血上氣づひ奉り先途と見届んと是も切技衆つと汗も
 あまの鎧の袖風入ぬぞ知まらぬ直冬打聞さるる有れ幸ひなるる
 大平の方ハ吾腹心の從將原千のく防げバ猶保ん水の手曲輪の水門も
 虎王ハ姉兵羽が助補と有りて飛鳥母子と疾く誘ひ落まらん前も彼
 等ハ説が如く死するハ勝る大切ハ泉下ハ有て見立べきぞ夏急るれ
 後の夏ども詳ハ示さぬ暇も飛鳥が肌ハ著るる中國西道探題の印
 是と以て衆とるがけバ諸國の武士思ひを寄せ我家ハ方人せん純くも人
 奪いしと心し七行とる落よと尖き主命虎王も夏止べき有るる

姉諸共ハ主從四人あり庭へ榻手より入る先手ハ雜兵此
 彼所より取囲むやうと有り右左得たりと兵羽が薙刀の又背巖しハ
 血烟立て倒る上と乗越踏越虎王が背負る韓衣姫の後ハ漆で夫人の
 手を取て大夫夫ハ勝る忠義の勇壮列婦猛き心も別路ハ四馬の患
 難桓山の腸と断夕暮の心の闇ハ兵羽鳥追く乱れ込入軍兵落人
 ぞと取巻せ心安く落さんと直冬自ら手と下し寄來る者ども人磯板
 屋のさしハ霰の如く手玉ハ突て投散せ折しも頻りハ降來る雨篠と
 突る大勢が右往左往ハ追重り競ふせりんと虎王兄弟手並勇
 戦ひぬ。次第ハ嵩ハ大軍の中ハ隔り主從ハ次女も見え遠近の雲打覆
 ハ宵闇のあやうき道を抜蒐し大庭先手ハ入來る一個の大將鳥羽玉の
 闇ハ紛る黒草の威隙を著下し。兎と取て身輕ハ出立り矢手狭

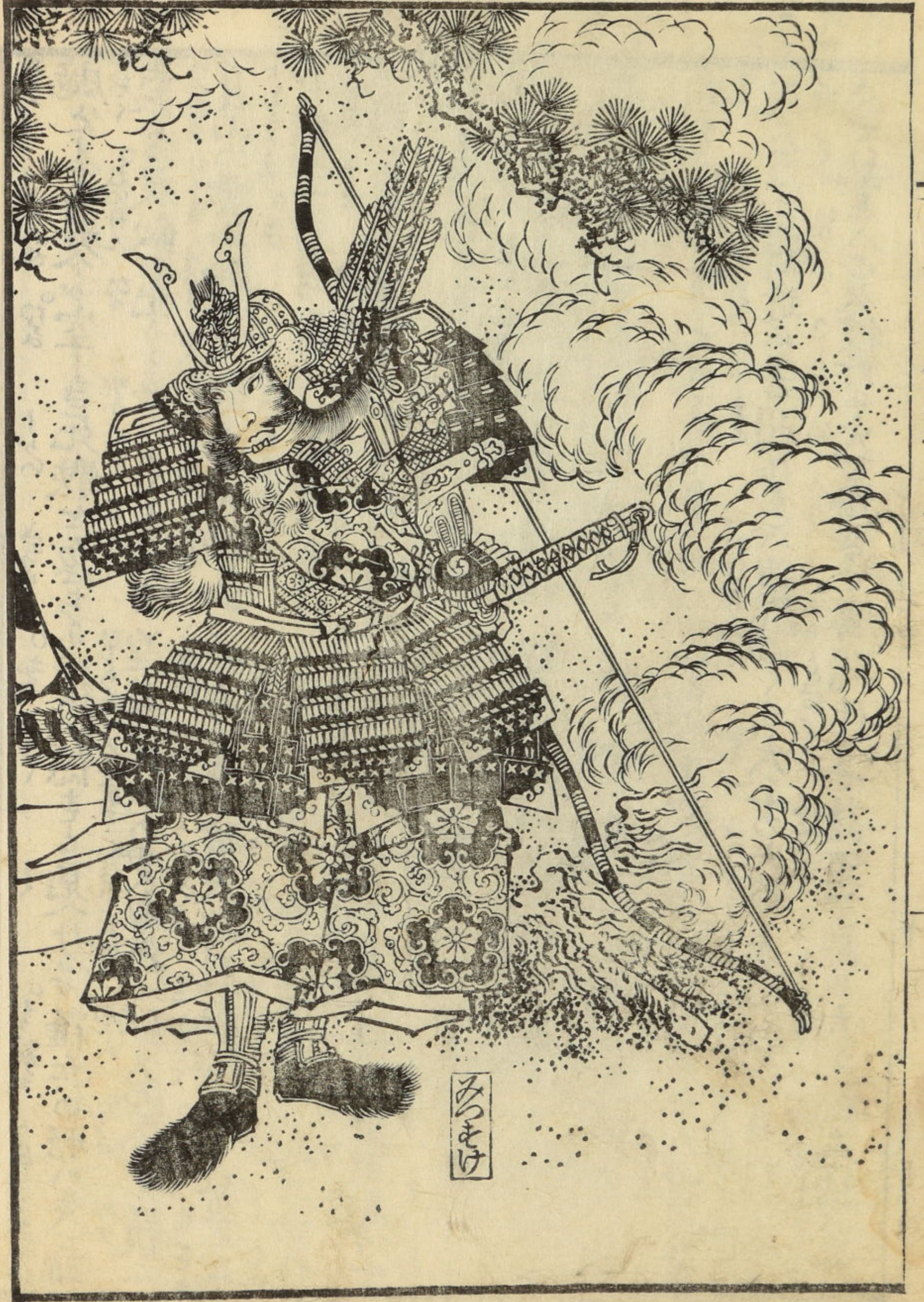
廣庭の群雲立ち軍勢の中交らぬ築山蔭の年古蘓鉄の茂ふ
 襲ミ夏の動靜を窺ふ折り大平の城戸より切入て二三の曲輪を攻破り
 赤松刑部貞村が従卒次第の込入る館に残り直冬が従將残らぬ
 討死し近侍の勇士西三人主を助て戦ふの此時も直冬が鳥江の破れ
 楚の頂羽山を裂く勇と震の魏陵の傷一宋の岳飛が巖を碎く怒を頭
 さしゆの年ゆき働けども其身鉄石のゆきざらば浅痕もも数ケ
 所の年痕と此所彼所の負よりけまば是れはありとも思ひけん鎧を脱で
 素肌となり鬢髪四方へ振乱し大童の姿を顯し最期の支度となり
 つも飛鳥の前韓衣姫へそや程遠く落延つらんと思ひ慮まを後安
 くて最早此世の要みし心と定り老馬頭自ら廣庭の踊り出二人の
 近侍の左右を防ぐ血み染大太刀振り掃り声あり立て敵を招面能

兼ぬき時運其機小至らぬ良策合期せぬ父子宿望の大志も空
 しく父直美の旧怨と與小重る我恨左馬頭直冬が最期の一戦見當後の
 談柄の終へようし罵りもわきを寄來る歩卒と七八人此所彼所切倒し猶
 進んで表の方へ驀直小馳向ふ慮徒の近侍此時追も同く手のく戦ひが
 痛手ゆらりと右左りごとと倒れてそは差違へてぞ死しうける直冬は
 これを顧る追もく加倍兎の怒をみ執り猛く馳出ると大將ありと看てけれ
 八方より押懸る其中の小一條の響箭飛來り直冬が弓矢の袖と下度りも廣
 椽先の敷居の恰木と立間も有む左の方の蘓鉄の茂ふ羽響音高く飛來る
 矢先精へ適へ直冬が膝口攻て甚深ふ立の急所の痛手小不積敢控と倒して
 飛石の辺小礮と座し直冬眼と活と見開き運命とて討死するも老馬頭
 直冬が首取人を者端武者もてよも不可有如何成敵ぞ名を名集と呼り

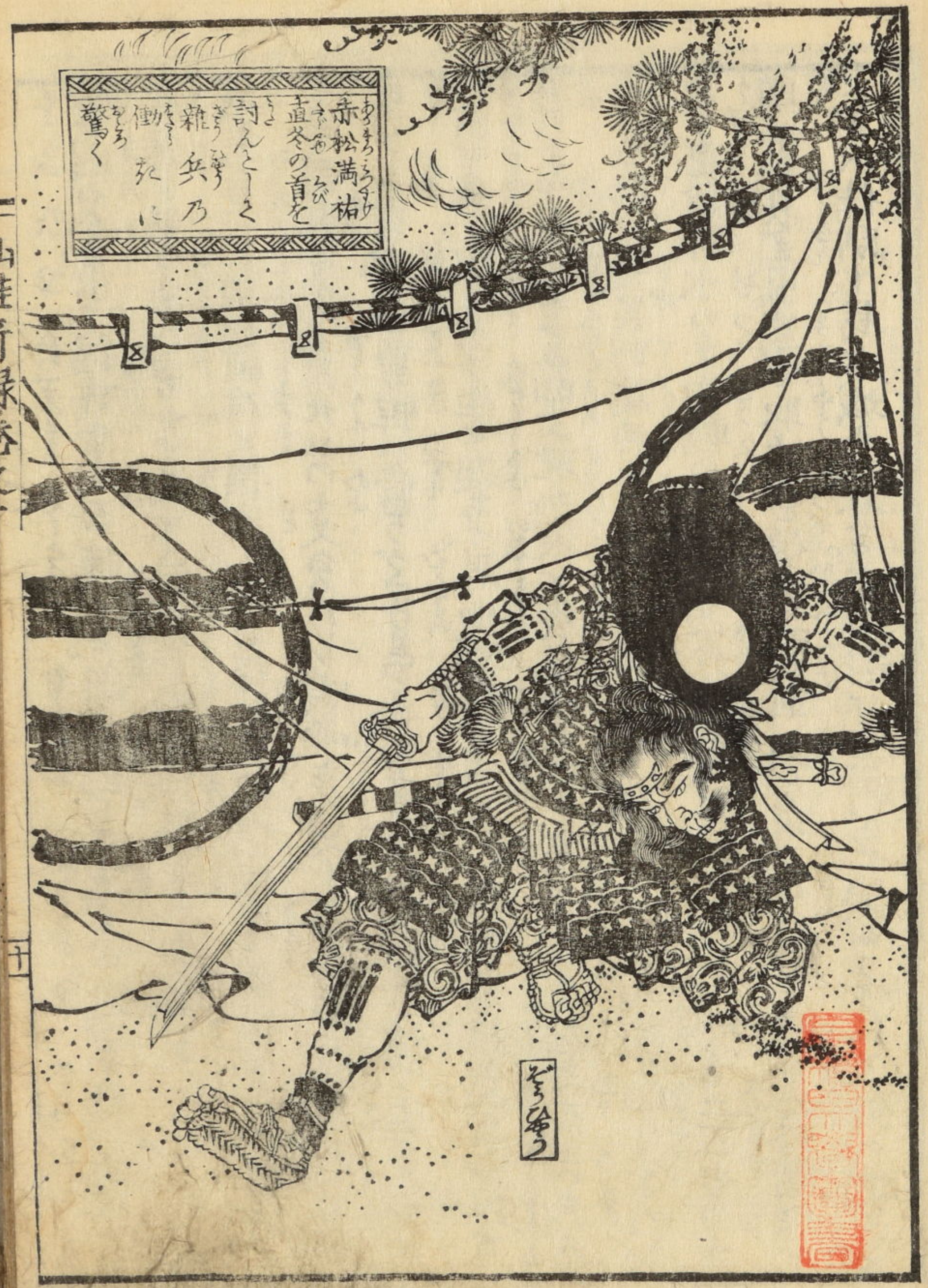
声の響き不慮と表の方一調高く相國義満の台命を蒙り此度討平の
馳下り一太夫の大将赤松刑部太輔貞村見泰と云言声聞て夏冬一声
高く打笑ひ赤松両家の大将の首を渡さば取有と通高名を致さる吾首と
獲て後日の賞與と諸肌押脱短刀を腹に突立引回して此時雨止雲はれて
空のまじりゆく星の光るる飛ぶ螢をまじり有ら闇のわゆる黒皮威の金具
輝く綺羅有大将木立際を植込の模鉄の葎より馳来りのを首を取んと立
寄所は廣庭先の草井戸より一個の雑兵頭と出彼大将の草摺をひかく梱を
引突き手先を拂ふ早業のひの曲者潜り板鏑を取て打返せば不意に打
て彼大将の思ひを確と突膝を數石の踏くらりせ漂ふ上と踊り越し得らんと駈
よる雑兵の直冬が帯る釵を取より早く板手も見せ首を搦て打落せば怪
あゝる今振上り太刀の光と諸共の明亮とて一道の陰焔する白氣立登り膝

臆とて直冬が空を死駈を忽ち覆ひ隠きと見へけるが雑兵の形は失て赫
赤るる灵釵の光りと覚く虚空の注ぎ向異形の叟忽然と頭を又さし覆ふ
夏山の雲の跨り夕闇の空を紛を飛去りけり彼大将の此動靜をわかれ不爲
打膽望奇なる今直冬が死すると等しく頭を出る彼雑兵が起居動作
手練の素より直冬が帯る釵を奪ひ取首打落せば忽ち一條の白氣起りて
屍を陰をのぞく虚空に掲上り光へ平く竜泉太阿ゆる優るを見个名
釵の奇特の将へ仙術と見えの辟眼の斯道の追討使棟上る榻手の大將播磨
國白旗の城主赤松三郎満祐より謀り寄て返逆の大將左馬頭直冬を討
取り射留さると天もひけと呼つるゆゑ後まを込入る諸軍勢も大将を友
討つる遠近の告聞ゆる遺憾も大手の大将赤松刑部貞村へ手勢を
卒て乱入を爰彼所へ火を掛き各勝開作と諸軍を圍り大手榻手持の陣

某日
世の文、赤松満祐
射たる赤松満祐
刑部貞村、赤松
如る成故、是は
書玉、官達、カ
世、赤松満祐
タレカ、何、モ、イ、セ
不合、カ、ヒ、ト、ヒ
け、先、又、イ、レ、シ、カ
計、カ、ナ、シ、ト、モ、セ、ラ
ヨ、ミ、テ、不、合、故、如
斯、カ、出、テ、為、ス



みづき



赤松満祐
直冬の首を
討んとす
雑兵乃
働に
驚く

そら

Red seal impression

所を固り令を出。猶殘黨を召捕べし。新小下知し。落人の逃。倉。檢。隊。兵。遣。
 異者と見るる。男。女。を。論。せ。ば。榻。来。ま。と。貞。村。の。吾。手。の。中。より。得。度。五。郎。二。郎。
 成美との。一個の。從。將。を。撰。出。し。密。に。謀。計。を。授。け。し。心。算。方。へ。遣。し。け。り。這。時。の。
 應。永。七。年。五。月。廿。日。の。夜。更。の。け。り。嗚。呼。哀。れ。一。老。馬。頭。直。冬。へ。武。略。の。長。
 び。ざ。る。有。む。も。勇。悍。の。當。り。か。け。ま。ど。も。父。直。美。の。宿。意。を。遂。げ。上。る。望。望。の。
 思。ひ。を。焦。り。空。く。半。生。を。過。ち。て。馬。塊。の。塵。と。成。果。ぬ。後。世。の。人。鑑。を。此。の。取。て。限。有。
 毒。計。を。忘。て。量。る。望。の。耽。り。家。を。喪。ひ。身。を。亡。し。ま。更。も。去。程。の。虎。王。の。夫。人。
 母子。を。助。け。卒。兵。羽。諸。共。辛。く。寄。手。の。用。を。切。散。し。一。條。の。血。路。を。開。き。安。内。知。
 たる。裏。道。の。水。の。千。曲。輪。の。水。門。より。谷。間。を。傳。ひ。嶺。を。攀。本。城。より。二。百。步。を。り。
 閑。道。を。退。き。出。鳥。を。取。蔓。を。便。し。猶。前。路。を。求。る。道。の。暗。き。五。月。閑。照。を。
 光。り。入。住。馴。し。我。本。城。に。立。登。る。炎。の。影。を。案。内。め。涙。み。ま。の。玉。鈴。の。道。を。這。

行程。不。後。と。見。し。昨。日。中。馴。し。領。忽。ち。小。猛。火。と。り。天。を。焦。り。契。り。関。の。
 祝。の。又。加。比。翼。の。艶。語。も。愛。を。成。行。杖。夫。の。今。立。上。る。煙。の。末。と。思。ひ。や。ま。と。ま。り。
 ま。の。裏。悲。し。も。飛。鳥。の。前。に。不。覚。決。小。噎。り。道。の。往。手。の。巖。の。上。に。伏。轉。て。
 打。泣。の。人。へ。兵。羽。虎。王。の。種。の。小。諫。の。藤。の。泰。を。与。へ。六。借。韓。衣。姫。と。甲。斐。の。
 去。り。も。介。抱。し。ち。ち。慰。て。迎。り。行。今。も。旅。路。の。浮。根。川。倚。辺。和。原。行。末。も。頼。む。木。の。
 本。雨。の。木。林。濡。る。叢。鳥。巖。居。寺。前。昔。原。生。茂。り。木。立。透。間。み。く。立。つ。も。嶮。岨。を。
 傳。入。行。て。播。磨。内。幡。の。國。境。の。高。内。香。炉。の。里。の。所。の。來。ぬ。け。り。此。嶽。の。峻。嶺。
 西。南。の。從。是。高。山。東。北。の。跨。り。て。木。樵。の。外。へ。通。以。來。ぬ。山。懷。の。村。里。も。漸。々。心。
 安。堵。で。主。從。四。人。圓。居。り。枯。柴。を。集。り。摺。火。打。て。虎。王。と。不。火。を。燃。し。需。る。
 衣。着。余。り。乾。し。須。臾。息。を。休。む。程。此。時。雨。の。全。く。止。ま。空。亦。雲。切。れ。風。涼。く。遠。小。
 此。日。の。月。代。皎。く。と。山。寺。の。鐘。の。音。最。幽。不。聞。ゆ。と。虎。王。の。指。を。折。て。刺。し。數。夜。

早四更とおぼしきもの。今我輩此姿を夜更の里人の門を叩くと山賊ぞと疑ひてよも宿の入り立。夫人のいづく勞れもひて姫君も物憂限り打困りぬ。月の光を便宜也。今宵の内此山を越る播磨の國と覺境を隔い夫迄の追人の心配不可有吾の夫人と員參らむ姉上の姫君をぬらりゆく。夜明の間に越行ばやと心よりて語合ハ男子の勝り。姉の兵羽も尤もり心ぞ烈き。卒を再び身發し。香炉の里を打越の播磨路さし女行所ハ奈何けん道辺の草の茂み引張。麻繩ハ穴突て兵羽の思はき礎と轉む。呪と響の相圖と覺く左の方の林の中より十四五人の隊兵頭と出中も真先に進む。隊將声さう立て鹿追ふ獵師ハ山と見まき世の諺不違ふまき。主人赤松刑部太輔貞村の遠計圖と外さ。落人有ハ討取んと撰む撰む此所ハ汝を待の待する譜代の勇將得藤五郎次郎成美あるぞ其が眼の遮りハ

所詮叶の籠の鳥覚悟せよと罵も不取あらと號と取囲む兵羽の素より虎王も不慮なく不意と打しを驚天し退と難く思へども心得るう小間虎王ハ背負う夫人と後不固の寄来る隊兵と右左ハ刀の電光稲妻の注流如く切倒せ續て掛る二の手の兩人額微塵と打懸を閃とくし自ら度切たる早業ハ兩人ハ狼狽味方討と右と左へ踏とけり。其間ハ得藤五郎次郎ハ慄き在る飛鳥の前と忽ち小股ハ曳抱へ鷲の得物ハ虎王より鶴の嶋鳥と取得さりと飛が如く小駈出まを虎王見るより狂氣の如く前を敵を打捨置真一文字ハ追駈れハ五郎次郎も韋駄天の奔る如く逸行は何國生も追詰て夫人ハ過ちさせしと飛鳥の如く飛りり膳と一度蹴上まハ叫と計ハ飛鳥の前と傍ハ槍と筋計と打盡所と一刀ハ討んとまるを成美が下より拂ハ刀の又先遊つ交つ一上一下進退便る嶮岨岩壁後まを助け来る二人の隊兵後

切てつるを早くも察し七揚るも又一人の首の巖の上の落返を刀の一人の二ッ小
 成て倒しけり。其間五郎次郎が振上る鋒と拂ふ向へ踊り越切込又先小三
 寸向脚の浅疵受燈く柏子の成美八元岸立る崖の崩れ真逆さる小陥入の
 扶地りと打笑ひ虎王の飛鳥の前を再び脊の負奈りせ姫君の上心元公一兵
 羽の奈何と立戻り始の所を尋まども更不行方知されれば其処より爰と呼廻り
 声さるるの雷とども吹来る松の風さるるの谷るのめもあがりけり。其羽の又韓衣
 姫の背の負て追来る隊兵を右支へ左の受追つ捲つ入乱と鋒より火と出し
 奮激突戦透間も有せと騒く内二人と切伏三人の手を謀せ猶も進ん戦
 中飛鳥の前の山身上身虎王が夏追も深く心懸とども相助の隙を得漸
 小て支る隊兵を八方に切靡け一条の路を需て峯を下り小落行跡より暮暮羅
 兵原落人返せと追来るを振返さる弓手馬手へ切先尖く切倒せ女と思ひ倫

残る者ども肝と消し雪頬を打て逃去けり。其羽の虎王飛鳥の前を声を限り小叫
 需とども此彼間を隔られ谷の岨の通ふの。城の騒ぐ木の宿鳥の羽打く
 外知るよるけし心の中の内惟ふや。兎角と此辺へ再び敵の追迫ら無下小
 勞て切る業あり且加ふる小姫君も我身もいづく勞れと一先此所を落
 延て緩徐の尋ね。弟さるるも虎王の武勇勝者者るれば夫人の上心氣遣
 有下然るく。我の問我の答て逸出。山又山小分上り看的の密林雨雲
 生ト古石潮文を夾じ五月の天の日和癖雲さ覆ひて月を翳其賜を断嶺の
 猿梢の宿る梟鳥の音さのいゝと憂を添て物妻さ限りある小嶮を越火きを
 渡り。樵夫の通ふ蹊を便り小辛と一村の里小出され曉雲東の天小棚引群
 鴉埒を出て鳴連夜へ朗明と明ふけり。姫君の素より其身も頼り小飢うけれ
 此村里小憩ひ情有者を語ひ一椀の飯小飢と凌ぎ斯て八人の怪れん言を事徳り

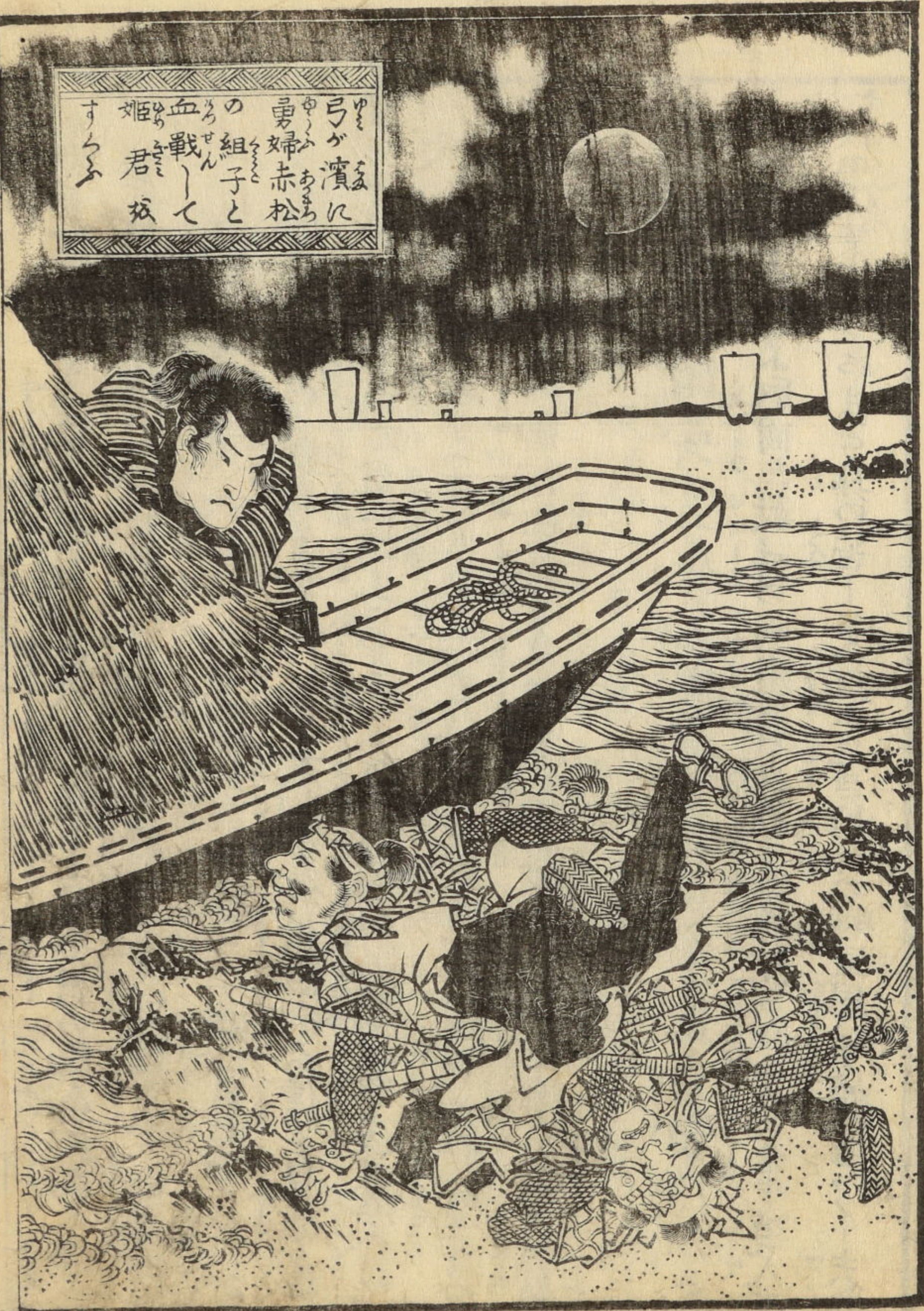
里の賤の女も便りて主従の衣服を更ぬ是より八環をも里の道辺を辿りつ。閑
 道の日は暮し又の嶮路の夜を明して廿三日の未下る頃行らむとて伯耆
 國弓ヶ濱の此方より一村里を出らうしが支問へき人ひまけは暫く木影の
 越つて根上松の腰打りて姫君を卸し奉らむ宵の舎り小恵まれば乾飯を
 水の浸潤て是と韓衣姫の進め様くと勞れば姫君の此頃の焦慮と憂旅の
 勞まふ殆ど困りて一向物も味ひぬと泣腫しうる眼もろろく虎王始り母
 上へ何國の忍び在るやん心苦しき限りあるか敢て死を遂のひけん父
 上の安否を問支難き旅の空我身の積る憂支のたろる世やと計りて人
 目のけま声立てようと計り泣詫めは呉羽の姫の背と撫つ昨日を深闇の
 褥の上の像を續松よ十種香よと慰め申せし身と等斯迄も無詮も苦
 泰らまらる緋もろぞ勞いやと計り諸與の泪の暮を在けるが喃姫上聞かせ

譬奈何の憂目ありとも兵羽が斯て有上の少しも心を勞しめひを周防の國
 山口の妻の便の人もあり夫を供奉奉らむて鬼も角も度と計り御身を
 奉れやべ母君の芽の虎王の像を奉らむれば氣づくは卒の片時も
 早言が瀆る便船と彼國まで出供せんとな勧め促さ折るは後の方の稲村
 より動靜の疾の皆聞えり斯る度もゆるうと豫て落人の網を張待設つる
 百年物我を赤松貞村が隊長の名も高き火鳥鬼三次と呼ぶ兵者
 有り擲取て手柄小まる其所の動をと言より早く吹立る呼子の笛の音色は遠て
 過ぎの雜兵此彼所より群來て八方より取固る心苦しき呉羽鳥姫の後を押
 固の女と思ひ悔りて不覚を取ると言も不敵忽ち反を掲ぐ八面の當り切捲
 手痛き手煉も敵の足勢殊に數日の戦ひの勞は切らる女業數を所の手煉は
 流る血汐と手を受當て咽と潤し逃散る追年の透を伺ひ漸くの面を開き

濱辺の方走り抜て渚の真砂地を爰と着的の巖の切岸に一艘の船
 あり是屈竟の徳家と姫君と忍び合はれ立戻る向ふの方より数隻の船
 兵引従へて又追来り火取鬼三次退しやうと切掛多し手痕も屈
 呉羽が働き或の輪袋袋車切咄手くろく十文字を力と尽し戦ひを討ち
 当んと取固む芽針の徳先蝶鳥の飛交如く切捲く風小誘ひ木の葉の如
 皆散る小邊失う残る二人の雜兵は猶困もせ右左又と振て切込を逃せ
 辟易横合より又一人が馳寄て手取ふせんと後抱治定と組付手首を
 拂へ胸元捕へ雜兵が手先引出せ呉羽の懐中是なん源家の白旗
 と言せも敢て振解二人と二度切倒し残る一人を弓手引付腰坪まで
 差通せ不積敢む倒る上其身も俱伏重の蠢二人を左右切伏せ
 刀を杖の取直し一息ホド吐所へ去のび傳る火取鬼三次飛りて勞れる

呉羽が鬚を弓手引くまき右手小刀を取直し雪を肌小押當て穴大通
 さんと見へる所小姫と隠せ管船小映と一声響くと等しく如何けん鬼
 三次の嗥號叫で真砂の上の筋計を打て仰向し吐嗟いふと痛手の呉羽も
 眼を省張て立上る向ふの小船の笠を開き立出る一個の壮士篋笠取捨砂
 上小頭と吾妹子恙なうり絶て久しき妹と脊か倚辺を船小繋ぎ留する
 縁合の今日巡り来て悦ばけしと思ひまや斯る手痕の動容腦る妻小逢ん
 呉心得がし進寄介抱まれ夢うとむり呉羽の手痕も打忘れ吾妻小在
 ませしう文野の太郎通教殿唯假初別と来し空し聞ふ三年が程思ひ焦て
 詫らふ暮茶ひよるの波祝今打寄て逢夏の柳身小余りと嬉しさとと縋り
 然もそ有ん斯と知る疾小来て救はん物を武士の引返さしら濱寄来る波の
 兵者小と手痛戦ひ道と来し巨細を語ると問問も心まき介抱の呉羽の

弓が濱に
 赤松の
 勇婦と
 組子と
 の戦い
 血戦
 姫君
 すくみ



山笠行録卷之二

十七

仙史音録卷之一



くれそ

心を取直し語るも便夏衣ひくと思ひ立ち直冬君の御企野分騷ぐ
 因幡の國輪笠の城小立籠り勢ひ猛き御旗上不日數寄来る都方赤松
 両家の軍配不意の朝駈夜討の懸引兵糧水の半断切れ日みく落行
 味方の勢叶へど我君も覚悟極し末期の御誼御家傳る白旗と御
 鏡と預けのつる夫人姫君共供し弟虎王共呂小落行山路の道まら落人討
 と闘と手強く戦ふ兄弟が又火き赤心も任せ運は是非もく夫人始虎王
 騷ぎの紛ふ見失ひ御行衛尋る其内も猶慕ひ来る追人の軍兵數日の戦ひ
 金石の心も急女業漸切抜此地まで姫君の御供し此濱より便船し周防の國追
 尋行文の便りも聞置つる吾背の在家へ便宜物と落来る道不期も待伏し
 貞村が一年の勢小取曲は數所の劍瘡肩故像し姫君の管船も忍びせし追人
 切抜供せんと心をまど身の苦しき既危き此場の時宜思ふ救ひる夫の

血補の神明の偏小御加護るべし悦び勇ら通教の始終を聞て歎息し女小精
 天晴太切の鏡鏡恙なく我又日るを諸將と語ひ左典廐の宿然如何晴
 奉ん後安く思ふ其先年直冬公の仰を受て軍用金と河内國島山家より
 持歸る途中にて山賊共小奪れ不覚の罪ハ外なく密小眼多りて此處過
 失を補ふ程の大切と立よと仰を蒙り汝又飛鳥の前の御情也姫君の像も
 一人御館を出しより如何も此耻を切小替て雪をよと思故我君蒙て試みる
 菊地太内の両家へ便り旗上後詰の援兵を憑下つし甲斐もみる両家
 内変有て國乱は家亡び立ち軒も漏雨の詮方なき漂泊折り直冬君の
 御旗上因幡の國輪笠の城小軍半と蒼の風説然有へ一圓取返し詮方有
 姫君散る成せると聞悲させその城の焼跡を見る便と朝まは船乗出て此

濱迫着等々一人の女我竹船相隠まを能く見れば韓衣姫子細美まを伏
 動靜語の隙も惜しき勢の追手支へられ半強く戦ふ呉羽を助け疾伴との詞
 聞き頃と遠當の我奇術を以て敵をいさかか危急の救ひ得まを數を所りとも
 剣瘡の浅く皆是急所と外れられ赤崎追船中を行ひ鬼の斯もして治療をまを
 姫君の船に在せしと諸共小卒一行と勲功夫の詞実も渡り得し船の中の嬉
 々々韓衣姫主従夫婦二世三世契及真砂の敷巡り逢らる互の悦び通教
 遠當の奇術伏し鬼三次が蠢起立後より觀念せよと切掛る心得りすと通教
 が身より七突迴其掲又兵羽が半煉血烟立て濱砂小控と倒り地響音と
 與の飛來る船の中風の隨意漕出と現小潔ま武士の氣張詰り戸が濱
 矢を射る如く行船の幸先もよ赤崎の浦回をさして漕去りぬ。

仙蛙奇録卷之一了



天竺 鴛鴦

